

第41回市民ふれあいトーク—女性のための防災をテーマにしたまちづくり—

日時 平成24年11月8日 13:00~14:30

場所 倉敷市保健所2階会議室

要約版

《市長》

今日は11月8日木曜日。良い歯の日、良いお肌の日と伺っております。平日のお忙しい中、今日は女性のための防災をテーマにしたまちづくり、ということで、心なしか男性の方が端っこの方にいらっしゃるようにも思えますけれど、先ほど司会も言いましたが、女性の為にも男性の為にも防災が重要ということで、このテーマとし、参加をされた方もいらっしゃるかと思います。午前中に神戸の震災を経験をされ、色々活動をして下さっております正井礼子（まさいれいこ）さんに来ていただいて、防災のお話を、震災を教訓にしたものをしていただいたということがあり、そのあとに設定をさせていただきました。大変多くの皆さんに参加をいただき誠にありがとうございます。市民ふれあいトークは、時々テーマに従って、また地域の公民館においてその地域のことについて、皆さんがどういうことを大事だと考えていらっしゃるのか、今日だったら防災のことについて、今の市の状況はこういう感じなんですけれど、皆さんはどういうところが大事だと思っておりますかとか、そういう意見交換をさせていただいたり、活動していらっしゃる方々から発表していただいたらいいなと思っており、それを参考にさせていただいて、私や、今日は防災の担当者の赤澤防災危機管理監が来ておりますけれど、市の方で政策の中に取り入れさせていただきたいと思っている、そういう会でございますのでよろしくお願いしたいと思います。

今日は、最初10分位、今の倉敷市の防災の状況、どういう備えをしているのかとか、昨年の東日本の大震災の後の取り組みの状況などをお話させていただきたいと思っております。その後、最初に申し上げましたように、自分はこういう防災について思いを持っているとか、活動をしている、こういう取り組みをしているということをご紹介いただいたら、他の方もそういうことに興味を持っていただいて、地域の方でも取り組んでみようとか、そういう活動にも繋がっていくんじゃないかと思っておりますので、皆さんの方からも積極的に発表していただければありがたいなと思っております。

最初に、昨年の東日本の大震災、3月11日があり、皆さんの防災への意識も、我々の街でも随分高まってきていると思っております。勿論、災害直後からは、倉敷市からも市の職員の大体10%近くの職員が現地の方に、かわりばんこに行き、お手伝いをして、保健所の保健師さんが現地に行き、大船渡市とか大槌町、現地に行き避難所に行きまして、避難者の方達の健康管理をしたりお手伝いをしました。避難所は、ほとんどの所が閉鎖をして、仮設住宅とかの方に移られているわけですけど、そういう状況の中で避難者の方達の思い等を我々の保健師の皆さんは持って倉敷市で今活動してくれています。東日本の大震災以降、倉敷市の方でも随分、防災の意識が高まってきているように思います。我々が最近経験をしました大変大きな災害と言いますと、今年の夏の台風の災害、昨年9月の台風の災害、平成16年の大きな高潮災害がありました。市内4000世帯位が床下、床上浸水になり、特に沿岸地域の方達は大変多くの浸水を被られたということがございまして、最近随分、防災意識も高まってきましたが、平成16年の災害より前の時には、倉敷市では自主防災組織はゼロに近かったと思っております。自主防災組織の単語は、皆さんご存知でし

ようか。16年より前の時は、市内では自主防災組織としてほとんど無く、消防局の方が皆さんと地域の町内会とかとご相談をして、防災の組織をして頂いているぐらいしかあまり無くて、非常に防災意識が、やはり災害が少ないということで低かったように思います。ところが16年以降、急激に自主防災組織への関心も高まってきているわけですが、中でも岡山県内でも、実は倉敷市の自主防災組織の割合はちょっと低いわけですが。県内の中でも下から何番目かぐらいのような状況で、やっこの前、自主防災組織の組織率が40%ぐらいになりました。平成16年からですから、そこから40%になった、割と上がったかなと思うんですけど、昨年東日本の大震災より前の時は30%ぐらいだった。そこから実は大変関心を持ってくださる方が増えて、自主防災組織の時には、うちの防災危機管理室の方から出前講座というものを、皆さんの方からお話しをいただくことも多いわけです。昨年の災害以前の平成22年度は1年間に22回の開催の依頼がありまして、全体で900名ぐらいの方が参加をしてくださりました。昨年度、平成23年度は、何と96回にいきなり増えて、震災後大変多くなり、5000名以上の方が参加されました。参加をしてくださった町内の方達が、今年、平成24年度から作ろうかということで、随分今年度になって増えて、防災組織を作ってくださっているような状況です。今年度平成24年度には、既に86回開催しており、更に既に予約だけでも30回近くまだプラスしてあるということで、昨年以降、市民の皆さんの防災への意識は非常に高くなってきていると思います。

倉敷市の防災の中で、市の防災の大きなどういふものを想定して考えているかということですが、国の方での我々の地域での一番大きな防災の対応をしないといけないというのが、今年の8月の末に国の内閣府の方から、その当時新聞とかにも随分出ました。南海トラフが物凄い地震になって、最大で最悪の状態を計算したらどうなるかというのが発表になり、議会などでも随分話が出ました。倉敷市では我々の一番大きな災害というのは大体震度5強で、津波が大体3メートルぐらい、最大でも来ると言われていたのが、今度はその南海トラフの最大、一番悪いというふうに見ましたら、震度6強で、岡山市もそうです。岡山県南地域は震度6強で、津波の最大は4メートルぐらいになる。平均3メートルぐらいになるということですが、津波もこれまで以上に最大で来たら来るといふことが、国の方から今来ております。それに対応して、倉敷市や岡山県が色々マップを作ったり細かな想定をするんですけど、正確には今後平成24年度中ですから来年の3月末ぐらいに、岡山県の方で、今回大雑把に一番強く来たらこのくらい来るといふのを基に、倉敷市では詳しく地区を区切って倉敷市もしくは東部、南部ということでのどのくらいの揺れが想定されるかというのを、今年度中に県が倉敷市の方に知らせてくれることになっています。それを基にして、倉敷市の方ではより細かな計画を作っていくわけです。

市としましては、昨年大きな地震が起きましたわけですので、それまで倉敷市も市民の皆さんも、まだまだ防災への関心がちょっと低かったということもありますので、色々な関心を高めていかないといけないということで取り組みを始めました。その一つが、防災マップ。これは9月号の皆さんのご家庭に配布されました広報紙に折込になっていたと思うんですが、実際の大きさはこれです。広報紙に挟み込みになって、地域によって色が違い、倉敷地区の方は紫色で水島地区の方は水色の枠になっていて、玉島の方はピンク色の枠になっていると聞いたんですが、こういうふうにして自分が住んでいらっしゃる地区

の分をお家の方に、広報紙の中に入れてお渡しをしております。前に作りしたのは平成17年で、7年前だったので、作り直さないといけないと思っていたんですけど、去年の災害を受け、マップにはこの洪水土砂災害ハザードマップ、津波ハザードマップ、大きくこの二つがあります。それで洪水土砂災害ハザードマップは、洪水土砂災害ですから津波じゃないわけです。津波の分は先ほど言いましたように、今年の年度末くらいにならないと県の方から詳しいのが来ないんです。それで市の方ではまず、皆さんのご家庭の方にお配りする分で、元々ありましたこの洪水土砂災害ハザードマップの、それぞれお家の近くの避難所が書いてあります。避難場所が倉敷幼稚園だとか、帯江の幼稚園、倉敷南公民館とか、書いてあるんですけど、これまでは無かったんですが、海拔表示を書きました。これまでは書いてなかったんです。どこどこ幼稚園とか、避難所はここですとか、中島小学校とか、書いてあったんですが、まず海拔表示を書いたのを配ろうということの思い、それぞれの避難場所の海拔表示を調べ、書き込みました。それから大きな緊急病院とかについても書き込みをし、まず自分の家の所は大体どのくらいかなあと見られると思います。そしてその近くの海拔表示が何メートルかということを見られて、それが3メートルだったと、5メートルだったら大丈夫なのか、3メートルだったらもし水が出てきたら心配かもしれない。じゃあ自分の近くの高台はどこかなとか、予め調べておいていかないとけないとか、そういうことを思っていたきたいということを出しております。

このマップは、国土交通省の方から各市町村が作らないといけないことになっているもので、洪水土砂災害ハザードマップということで、我々の高梁川が大変な洪水を起こして、以前豊岡市で堤防が切れまして街が浸かりましたよね。そういうようなことになった場合に、どうなるかというのを示したのが、この色が付いている所で、黄色はこの辺です。茶屋町、黄色は大体50cm位で、緑色が大体1m位。水色が2m位。濃くなっていくと3m、4m位のももしも高梁川が大規模な決壊を起こした場合、ほとんど倉敷市の町は浸かってしまうんです。そんなことは無いですけど、国土交通省の方から必ずどこも作りなさい。

「もしも堤防が切れた時には、こんなことになるから日頃から準備しておかなければいけないですよ」ということで、作ることになっています。どうせ作るんだったら、海拔も書いておこうとこういうふうにしております。高梁川の堤防は切れませんが、強化しますので、切れることはよもや無いと思いますし、国土交通省が力を入れてくれますから、こんなことは無いと思いますが、一応こういうふうにはなっています。それで海拔が何mということになっておまして、ここに、この道路は海拔2.4mと書いてありますけれど、年末に、今後浸水をするかもしれない地域について、海拔表示というものを電柱とか、道路の看板とかに付けていくようにしております。浸水をしない地域については付ける必要が無いので付けないんですけど、浸水するかもしれない地域については、標高が2.4mだったら気を付けんといかんとか、地域の避難場所、高台は調べとかねばいかんということで、市内の300箇所位に大体年内の設置に向けて今準備をしております。もしも浸水をした時には、水に浸かるかもしれない避難場所には、ここはちょっと標高が低いので、避難所としては使えませんというのをその避難場所の近くの今まで避難場所と書いてある所は、浸水の時には使えませんというように表示を変えていこうと思います。また、国からの想定が変わりましたら、該当地区には追加しますし、該当からはずれたら撤去するというように段々になっていくようにしていきたいと思っております。それで、浸水区域がどうだとか、何m位ということがありまして、自主防災組織のこと、それから地

域の中で毎月1日の日に、朝と夕方に地域の小学校とか公民館の拡声塔から、朝7時45分と夕方6時半に鳥の声がピョピョピョと聞こえるのがあると思いますけど、聞いたことがあると思う方は挙手をお願いします。ありがとうございます。半分位ですね。段々増えてきました。最初設置した頃にはほとんどいらっしゃらなかったんですけど、最近は認識をしてくださる方が増えてきています。拡声塔はもしも市の方で、一番ありえないんですが、もしかして使う具体的なものとしては、北朝鮮からテポドンが飛んできますと、真面目な国の想定ですよ。国の方からそういう指令が来るわけです。そしたら、それを使って全市にウィーンという音と共に、危険ですから家屋の中に避難してくださいとか、ということを行います。もしくは一番日頃から使っているのは、台風の際に避難勧告を市の方がした時に、児島下の町何丁目では上の溜池が溢れるかもしれないので、どこどこに逃げてくださいとか、昨年の9月の台風災害の際には、児島の郷内地区で大変大規模な土砂崩れが起きて、小学校が土砂で埋まったんですけど、その時に最初は小学校が避難場所になっていたのですが、途中から裏山から水が出てきて危ないということで、郷内中学校の方に避難場所を変えました。その時に本庁の方から、中学校の方に避難場所を変更しますということ郷内地区の拡声塔のスピーカーから流しまして、これは結構皆さんが聞いてくださって、そちらの方に逃げていただいたりということなどしております。そういう全市一斉の伝達の手段、それから地域での最初に申しあげました自主防災組織の活動、自主防災組織の皆さんへの例えばメールとかの連絡とか、防災のエリアメールとかはこれから導入しますかね。携帯の方でドコモさんであればエリアメールというのがあります。何も契約しなくても、倉敷市でこの地区で避難勧告を出してますというのが出てきたら、倉敷市からドコモをお願いをして、郷内地区だったら郷内地区、そこまで細かくできないかもしれないんですが、「どこの地区に避難勧告が出ています。」というのを強制的にメールでドコモだったらドコモの携帯の契約の人に行くというのと倉敷市は契約をしております。ドコモとauとソフトバンク3社と出来るようになっていきます。それと同時に、自主防災組織の方々への連絡、地域の小学校への連絡などで、いざという時の災害の対応をしていくようにということで考えております。

倉敷みらい公園の地図ですけれど、みらい公園に行って下さった方はどの位いらっしゃいますでしょうか。9割位が行かれています、ありがとうございます。ご存知のように倉敷みらい公園は市の公園でございます。観光客の方は倉敷の公園だとはいえな方が結構いらっしゃるんですが、良い公園があるねとはよく言ってくださるんですが、私どもはこのみらい公園、出来たのは去年の11月23日ですけれどご存知のようにその2年前から検討をしてきまして、最初の段階から倉敷市の駅の目の前の所に防災機能を備えた公園を造ろうということで造りました。勿論緑の公園ですけれど、災害時にはあずまや、避難の時の応急処置をするものだったり、一番大きな特徴は何と言ってもトイレが無いと困るわけですので、ベンチが実は外すとトイレになる、下水のマンホールに直結してテントみたいなものをすれば、直ぐトイレになる。炊き出しができるかまどベンチだったり、照明も太陽光の照明ということに17基位付けており、水も流れておりますので、いざという時に多くの方が避難をされた場合に、ある程度の一次避難場所になるのではないかなということで倉敷みらい公園の整備をいたしております。結構、県外からの視察がたくさん来ておまして、駅の目の前で市の中心街の所でこういう防災の公園、そして緑の憩いの公園を造っているということで、随分視察に来ていただいております。

これはハード整備といいますか、防災の時の備え、いざという時に逃げられるようにということで日頃から確認をしていただくこと。自主防災組織でそれぞれの方が準備をしていただくということ。今日の一つのテーマでもあるんですけど、女性のための防災をテーマにしたまちづくり、今市の方で一つ準備しておりますのが、福祉避難所の設置でございます。避難所は普通は小学校とか中学校とか公民館でして、最寄の小学校、中学校に避難をしようということになるわけですけど、障がいのある方、年配で要支援が必要な方などについて、小学校や体育館とかではなかなか座れないし、ということなどもありますので、私の公約でもあるんですけど、福祉避難所を各中学校区に一つ位は設けるようにしたいと思っており、具体的には地域の特別養護老人ホームなどと福祉避難所の協定を結ぶように検討しております。一般的には元気な方は、小学校、中学校とか、足が悪かったり年配の方は、公民館だと畳みの所もありますので、そこも使っていただきます。ただ寝たきりの方とか、障がいがあって要支援が必要な方については、元々の設備が整っている例えば特別養護老人ホームなどに避難をしていただけるような協定を今年度中に結ぶように、今協議をしております。又できましたら新聞などでも協議の発表をしようと思っているんですけど、そういう受け入れ態勢の整えなどを今やっているところです。

さて、「女性のための防災をテーマにしたまちづくり」でございますが、今日の午前中の講演の方のお話などでも出ましたし、また昨年の中東の大震災でも、うちの保健師の皆さんも行っていましたけれども、やはり女性だと一番着替えのこともそうですし、それから子どもさん、泣いたら避難所で「うるさい。」と言われてたり、外へ出ないといけないとか、それから妊婦さんのこと、それから年配の体が、足が悪くなって、なかなかフロアの所では活動がしにくいとか、色んなことがあると思います。それで市の方では、まだまだ女性のための特有のことへの準備はできていないものですので、今日は私の方から是非皆さんに、そういう観点とか、それから自分の活動はこういうことと教えていただければ、大変ありがたいと思っております。どういうふうにすれば「女性のための防災をテーマにしたまちづくり」、こういう観点のところが、いるんじゃないかとか、その辺りが是非皆さんに教えていただきたいと思っております。皆さんとのお話の中で私も自分の意見を言いたいですし、皆さんの方からも今日、是非、意見をいただければありがたいと思っております。まだまだ市の方では女性を特化して、女性特有でテーマにした、防災をテーマにしたまちづくりは、まだまだできておりません。こういうところが重要なんじゃないかとか、その辺りのことを是非皆さんの方からも、ご指摘とか、ご自分の活動の発表とか、お願いできればと思いますので、よろしく願いいたします。

《参加者 A さん》

先ほどのハザードマップの件で、私は防災に関わる仕事をしているので補足説明させていただきますと、ハザードマップはある想定した災害を基に作られているので、はっきり言ってマジックみたいなものですね。マジックみたいなもので一つ条件を変えると、色々浸水の範囲も変わってしまうんです。ここから私たちが読み取らなければならない情報というのは、水の特徴を考えると当然水は低い所に溜まりますし、高い所から低い所に流れるので、色の濃い所は低い所だということを改めて認識する必要があると思います。そういった大切な情報をこのハザードマップから読み取るというのが1点ポイントとしてあるというのと、標高の標識を市内にお付けになるということで、凄く良い取り組みだと思っ

ですが、標高についてもここが低い地域だということを危険なところを示すと言うのもそうですけど、どこが低くてどこが高い所なのかという標高の認識を自分たちの生活の中で、身に付けるというのが一番大切なポイントだと思います。先ほどのハザードマップはマジックだとお話させていただいたんですが、マジックなので内閣府の被害想定もそうですけど、津波が3mにもなれば4mにもなるというのは、計算の条件の一つなんですね。どこが低くてどこが高い所なのかというのは絶対的な真実なので、間違いではない。津波からも低い所から高い所へ逃げれば必ず命は助かりますから、そういった意味で標高の標識を自分たちの生活の目に付く所にたくさん付けていただくというのが、大事なかなと思いました。

《市長》

おっしゃっていただいたように、濃い色の所の方が低いということですので、なかなか国土交通省の内閣府の想定を基にこれを出すということになっておりますので、実際はこうはなりませんよというふうには書けないわけです。濃い所は標高が低い、且つ一応海拔という言い方にしたんですけど、海拔1.4mだとか、倉敷地区は結構低い所が多いので、足高も2.0だし、倉敷公民館も4.2ですから、低い所が多いので、そういう所をみてもらいたいということでこれを作っております。今後街中の方に、表示をしていきたいと思っておりますので、目に付いて色々関心を持っていただけたらと思います。

《参加者Bさん》

障がい者の母親達からお願いしてくれというのを預かって来ましたので、読ませていただきます。『私たちは障がい者を持つ母親ですので、障がいのある子どもを連れて一般の避難所に行くことは、今の所考えられません。私達にとっては女性としての立場よりも障がい児者の親としての立場の方が優先されます。福祉避難所の設置、自主防災組織の設置促進、要援護者への対応をまずは行政側が引っ張って、地域ごとの対応を考えるきっかけにするなどをお願い致します。』

《市長》

障がいを持たれる子どもさんの親御さんたちの意見ということで、発表いただきました。今回福祉避難所の設置につきまして、岡山県内でも福祉避難所の設置は、まだあまり進んでおりません。特にこの福祉避難所は、さっきも説明をしましたが、障がいのある方、要支援の方とか介護の方について、普段の避難所ではなかなか難しいんじゃないかと、それぞれお困りになるかもしれないので、比較的専門知識の高い所へ行っていただいた方がいいんじゃないかということで、今交渉をしております。まずは特別養護老人ホームさんと協議をして進めていければいいなと思っていますけれども、入っていただける人数の関係もあると思いますので、協定を結んでみて色んな訓練の中で、広がりが出てくるように出来ればいいなと思っています。障がいのある子供さんたちを持たれる方につきまして、本当に通常以上に難しい点が多くなってくると思いますので、皆で支えあえる仕組みの一つとして、福祉避難所の設置をなるべく早くしていきたいと思っています。防災訓練などでは、そういうことの実践を組み込んだものはやってないんですけども、今後の防災訓練は福祉避難所も入っていただいて、防災訓練などやっていきたいと思っています。

《参加者 C さん》

私は午前中の講演会「女性と災害」初めて聞かせていただき非常に自分の防災意識の低さ、学ぶことが大きくありました。午前中に正井先生のお話を聞いた後に、市長との直接のふれあいトークがあるということは非常に効果があると思って、喜んでこの会に参加させていただいたわけでございます。その中で非常にテレビとか、震災の後、阪神、東日本の震災の後、新聞であるとかテレビであるとか色んな報道がされましたが、その中で報道されなかった女性たちの命ですね、それから人権侵害、トイレの場合であるとか、先ほど市長がおっしゃいましたが妊婦さんの問題とか、命に関わるような深刻な問題がたくさんあったということ、実際に被害にあっておられます正井先生、東日本にも度々伺っておられる先生でおられましたので、非常に説得力がありました。一番印象に残っておりますことは、防災会議とか、倉敷市にも防災危機管理室、防災の室があるということと、先ほど市長さんが防災について非常に意識を高めてくださって、安心安全なまちづくりについて力を出していただくことも良く判りました。その中で防災会議とか防災危機管理室とか、そういうところの女性の参画が非常に大事だということ、色んな女性のことをそういった命を守る対策とかということが、細かい所、トイレの設置にしましても、ある所では男性か女性かわからないというようなことで、非常にづらい思いをしたという人権に関わる問題でございます。会議には必ず女性を参画させていただくこと。それから管理室には女性の職員さんが何人いらっしゃるのか、お尋ねして私の質問にかえさせていただきます。

《市長》

防災会議のことについて、女性の参画ということ、倉敷市の現在あります倉敷市防災会議は、46人の会員の方がいらっしゃるんですが、その内4人しかいらっしゃらないんです。今日は、こちらに1名の方が、女性防火クラブの方が来てくださっておりますが。実は大体、市の防災会議というと、医師会の会長さんとか、町内会の連合会の会長さんとか、倉敷市の運送組合の会長さん、日通の支店長、そういうふうな役職でお願いをしている場合が多いので、人数が非常に少なくなっています。今の任期が今年度で終わりますので、来年度の25年度の防災会議の時までには何とか、今10%位しかおりませんので、この率を高めないといけないと思っております。市議会の方からも確か女性の牧野議員さんからご質問いただいたと思いますけれど、議員さんからも女性の立場がわかる人が防災会議のメンバーにいないといけないということで、言っていたいておりますので、高めていこうと思っております。例えば町内会から出る時でも、会長さんは男性なんですけど女性の役員の方をお願いしますとか、市の方からお願いすれば出していただければと思うので、そういうこともお願いして割合を高めていくようにしたいと思っております。

それから防災の女性の職員は、総務との兼務も入れて2名です。災害が起きましたら皆でやりますので、元々は女性職員はいなかったんですけど、言われた様なご意見があるので、1名は嘱託ですが、必要なときは総務の女性も手伝ったりして、女性の観点で、私もやはり震災のこととかを色々拝見しても、トイレは必ず分けないといけないとか、基本的なことから始まって、着替えもあるんで仕切りをしないといけないとか、そういうこともあると思いますので、さっき言ってくださった妊婦さん、子どもさんのことについても何かもし起こった時には、どういうふうにすればいいかなと、考えているんですけども、対策をしないといけないと思います。

《参加者Dさん》

ハザードマップ、広報くらしき6月号を皆さんも見られたことと思います。市長さんが第2期目としてなられ、6つの政策30の施策ということでこの任期に取り組みようとする目的を書いておられます。その中の3番に災害に強く、安心して暮らせるまちをつくりますと明言されており、その中で今日、福祉避難所についてお伺いしようと思いましたが、説明があったのでそれはそういうもんだなということが良く判りました。それと2番目の方が要援護の方を対象にした避難のあり方についてお話されましたが、私も民生委員をさせていただいております関係上、要援護者・要避難援護者台帳を作成し、毎年変化が無いかどうかをチェックし、増えた人などそういうことで提出しております。が、その台帳をせっかく作っても民生委員だけが持っていないと、かつて私は何年間か、倉敷市の情報委員の方にも参画させていただきましたが、その際でも個人情報があくまで優先されまして、折角避難する時に援護がいる人の名前があがっても、それは本当に極力災害が来るまでは持っていてくださいと。いざ来そうな時は通達があるから、その時は回して皆で助けましょうというような趣旨のようにいつもお伺いするんですけど、それでは間に合わない。特に市の方が福祉避難所を設置されたりするんだったら、私たちも自主防災組織がある地区も無い地区も、どうやってこの人を、障がいがある方も中にはいらっしゃいますし、高齢が障がいになっていらっしゃる方もいらっしゃるの、その方をどうやって。それが1番の方の説明にあったハザードマップなんですけど、私の地区は水が流れてくる下の方から水が流れてくる上に向かって行かなければならないので、とても狭い道を行くし、混乱するし、非常に難しい所です。非常に日頃からの訓練があるかなと思うんですけど、それを一人では出来ませんから町内会長や町内役員に、こういう人がいるんですから皆で守っていきましょう、と言おうと思っても、出来るだけ口外しない方法を今採られていると思うんです。その要援護者の方が居ること、それから台帳もあること、ならば出来たら皆で日頃から助け合えるような地域づくりにしていきたいので、個人情報も勿論必要ですけれども、ある点、皆でそれを共有したいなど、切にお願いしたいと思っております。

もう一つ。先ほどの方の防災会議の委員についても、読売新聞で今年4月19日に「防災会議、女性を登用」と、とても低い数字が出ています。これは県単位で発表されているので、岡山県は3人と聞いていますけれども、岡山県の防災会議に出させていただくのは倉敷市からの私が1人だったんですが、今年から職員の方が2人出て来られたので、石井知事さんは岡山県は3人ですと言ったら、本当に新聞にも3人と正しく載っていました。そういう点でもどんどん色々な方面で委員になって、いざという時に困らないための準備をしていけたらと思います。

《市長》

県もまだ3人なんです。その内2人は県の職員だったんです。こちらの方から無理でもお願いして、女性の委員の方をというふうにしていかないといけないですね。

県の方にももっと率を上げてもらえるように言わないといけないと思いましたが、先ほどの要避難の援護者の方の台帳の点。それはそうです。私もそう思います。難しい問題でもあります。一方で個人情報が非常に国の方からも言ってくるし、民生委員さんは勿論個人情報の点について、当然守秘義務があるのを守ってくださっているの、そこの兼ね合いでこの個人情報を皆で回すということになるわけで、そこが国の方へ何回か福祉の

方も確認をしているみたいなんです、今のところあまりいい返答が帰ってきてないみたいなんです、一方と言われるように、じっと持っているだけでは、効果もいざという時には上がらないと思うので、何とか良い方法が無いかなと私も思っております。引き続き、国の方にも色々言っていきたいと思いますし、実際的に法律も守りながら、皆で情報を共有して、あそこには一人暮らしで90歳を超える女性が一人で住んでいるとか、そういうのが共有できるようになればと思いますので、貴重なご意見誠にありがとうございます。

《参加者 E さん》

要援護者名簿に私の娘も登録させていただいています。登録している人は、助けてくださいということで名簿に記入しているので、隠してもら必要は全くないです。もっとたくさん要援護者はいますが、知られたくない人は要援護者名簿に記入していないので、その誤解があると思います。東日本大震災のときにはその名簿がボランティアに渡って、助けていただいてありがとうございましたという結果がでています。その点参考までに。

《市長》

わかりました。私も確認してみないとわかりませんが、今言われたように、要援護者の個人情報を出したくない人はそもそも申込んでないことになっています。書いている方は助けてもらいたいと思っていらっしゃる。ここからは、調べてみないと分かりませんが、もう1回書いてもらわないといけないかもしれませんが、自分は要援護者で助けてもらいたいという情報を他の人に出しても良いですとはっきり書いてもらっていないと、今は出したら駄目という法律になっていると思います。そこを直せばいけるのだったらいいかもしれないと今思いました。

《参加者 F さん》

度々すみません。個人情報の問題では、先ほど防災会議にでられている女性防火委員の方や男性の方がおっしゃったとおりです。私は平成16年に日本全国で台風が勃発した時、長野県松本市が非常に水害の被害にあった時に、その自治会長さんのところに、ヒアリングにいかせていただきました。そこでも要援護者の避難のことが非常に大きな問題となったのですが、避難をしなければならぬ土壇場にどうしたかと言うと、自治会長さんが俺の責任でみんなに名簿を配って助けて回ったんだということです。市長さんや市の行政の立場からすると、そういったことは色々なしがらみがあって難しいと思いますが、私たち市民の目からすれば、命を守るのはやはり自分たち。目の前で困っている人がいれば、助けるのが人としてのあり方だと思います。緊急時になれば市民の自分たちの合意でできることとして、要援護者、東日本大震災のときもそうですし、過去の水害の時もそうだったので、できることはあるんじゃないかと今話を聞いて感じました。

《市長》

ありがとうございました。松本市も、俺の権限でやるということで、市からは駄目と言われたんでしょうね。何かうまくできる方法があればよいのですが。よく検討します。

《参加者 G さん》

親が透析をしているので、1階とか2階とか水没する時に避難場所から病院に行くのは難しいと思うので、何か対策を練っていただいて、設備を整えてほしいと思いました。

〈市長〉

もう少し詳しくお願いします。1階と2階ですか。

〈Gさん〉

3m4mとか場所によって水没するじゃないですか、移動困難な親が矢掛町に住んでいて、週に3回真備町の病院に通っているのですが、(ハザードマップで)真備が紫色になっているのでどうなのかなと思っています。水がひくのも時間がかかると聞いたので、自分の家で用意すればよいと思いますが、なかなかできないので。地震があったときにどこにいるかわからないので、そういったことも考えてほしいなと思いました。

〈市長〉

まずは、親御さんが行かれる病院とか、よく行かれる所から近くにある標高が高い避難所は自分自身でも確認をしていただく必要があると思います。それと将来的なことかもしれませんが、今後色々なITの技術も高まってくると思います。そのときに、私が今考えているだけですが、スマホで緊急発信をしたら、自分がどこにいるという通報がいくというのも、将来的にはできるのではないかと思います。そう簡単にはできないと思いますが。まずは自分がいる所、自分がよく近くで行くところを確かめておくことが必要だと思います。このハザードマップは国土交通省の指導で作っているのですが、この紫色の所は真備町なんですけれど、高梁川が流れていて、ここが小田川で、紫色の所は計算上で5メートル浸水するところとなっています。5メートルだったら、家も2階までになります。みんな心配しますよね。だれでも心配すると思います。どうして、こういう計算になっているかという、以前小田川が度々氾濫することがあって、高梁川や小田川が決壊したときに、どこまで水がくるかという真備は海拔1メートル位のところが多い。だからここまで水がきますよということで色が塗ってあります。普通はこんなことはおこりません。ただ、高梁川は1級河川で国の管理ですが、勿論高梁川や小田川の堤防がきれないように再三にわたって市から言っていますし、国もやってくれています。

もう1つ、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、小田川が高梁川に合流しているのですが、高梁川のほうが当然水流が多いので強い。すると雨が降ったら、小田川の水が流れにくいということになります。すると小田川が、昔は度々氾濫して、真備の地域はよく水に浸かっていました。今もたまにあります。それを避けるために、今日関係の方がいらっしゃるかもしれませんが、柳井原のところの堰で池になっている所を、小田川の水は柳井原を抜けて、高梁川に合流するようにしようという国土交通省の計画が進んでいます。そうすれば、高梁川に水が直接あたらしたら、水流が強いところで水が抜けないということが解消されます。小田川は小田川で下流に流れます。遠くない時期に工事が進められるように、国土交通省と相談しています。それができれば、今より安心感が高まります。今も安心ですが、より安心していただけたと思います。近くの高台を確認しておくようお願い下さい。

《参加者 H さん》

仙台市長がおっしゃっていた言葉で、以前から自治とかに女性が関わっていた地域の避難所では、避難所の運営がうまくいったと、普段から女性が関わっていなかった町内会の避難所では、運営がうまくいかなかったと。普段から女性がいかに関わっていくかは避難とか緊急のときに大きくでますと言われていた言葉が印象に残っています。それが1点。

もう1点は、実家が阿知3丁目で再開発エリアのちょっと外側にあります。あのエリアはご存知のとおり、中が迷路のようになっています。火事が起きたときにも、大惨事になるような地域だと思えます。そのエリアの再開発がうまく進むことを願っています。

3点目で、国際ワークキャンプという活動があるのですが、世界中で2,000から3,000くらいのボランティアキャンプが行われていて、大体公民館だとかテントとかで、20歳代の学生や社会人が多いのですが、何週間か共同生活をして、その場で必要最低のことをみんなでボランティアをするという活動です。私も3回、日本でも参加したことがあります。何週間も公民館のような雑魚寝で生活すると、普通の好んで集まってきた健康な人でも、ものすごいストレスです。男女一緒に、もちろん着替えもその辺りで、交代でトイレなり、数少ないシャワーを使ったりということを、是非、倉敷で1回計画してみたらどうかと思っています。市の職員が関わると、実際の緊急のときはそんなことはいかないと思うのですが、どういうことが困るかとか、どういう争いが起きるとか、どういうものがよいか。公民館であれば、シャワーがないので、着替えなり、水が使えなくても体をふくことができない、ということも実際やってみて、1週間経つと色々な問題がわかります。一番良いのは、みらい公園でやってみて、他の地域からボランティアで来た人も受け入れるというか、東北で聞いたのですが、地元意識で外からの力がすぐに入ってくれなかったと。色々な倉敷という発信が90カ国くらいに情報発信ができるので、倉敷という名前も伝わるし、お互いに色々な風がはいてくるかなと思います。

《市長》

国際ワークキャンプはどこであるのですか。

《Hさん》

日本では大きいNGOの団体があって、そこを窓口にして、世界で90カ国くらい団体があって、ネットワークをもってそれぞれの情報を発信したり、大きいのは農作業だったり、アジアで橋を作ったり、日本でも農村で収穫の手伝いをしたり、大きい祭りの手伝いをしたり、人手が少なかったり、何か必要とされていたり、というのが色々な国から集まってきて寝泊りしながら、自炊して活動をするというものです。

《市長》

イメージはわかりました。ありがとうございます。今、防災訓練の進化した版のことを言ってくださったと思います。倉敷市の今の防災訓練はまだまだ初期段階だと思います。この前中庄のマスカット球場の補助球場のところで、楽天のキャンプをしています。そこで倉敷市全体の大きな訓練をしました。そのとき初めて、南海トラフで地震が起こった想定で、全市一斉に同じ想定で、参加してくださる町内の方が小学校へ避難したりとかしました。まだまだそんな段階です。今言われたように、実際の避難民になったときの状況

を想定してするような何日かのキャンプはすぐには難しいと思いますが、そのうち。何日かでもそういうことを体験してみることはよいかもしれませんね。すぐには難しいですが。キャンプに市の防災の職員が参加して状況をよく知るというのもいいかもしれないと思いましたが。実際の想定を体験し勉強してみるのも重要かと思しますので、ホームページなども拝見してみたいと思います。最初に、仙台市長さん女性の奥山市長さんで非常に良い方で、市長会でよくお会いするのですが、今言ってくくださったように、女性が避難所の運営とかに関わったところはうまくいっていると、でも男性ばかりだったらうまくいっていない所も多かったとのお話をされています。避難民の方も男女半々くらいかと思えます。保健福祉の面は女性が担当してくださるとかの観点を我々も持っていきたいと思えますし、先の方も言ってくくださったように防災会議などの話もしっかり取り上げていきたいと思えます。ありがとうございます。阿知3丁目の再開発も、市の街の中心部ですから、しっかり進むようにという思いはもっています。

《参加者Iさん》

震災でこちらに避難してきている方たちのサポートをさせていただき活動をしています。東日本大震災で岡山県内に1,000人くらいの方が避難してこられていて、倉敷市にも100人以上の方がおられると聞いています。その大部分の方が福島原発事故により子どもさんへの影響を心配されて、母子避難してこられている方がたくさんおられるとお聞きしています。その方たちが、今日々の生活でいっぱいですが、そういう災害にあった方の受け入れをどうするのかどう支えていくのか、岡山の消防局の調査によるとその7割が岡山に住みたいというアンケート結果がありまして、次に倉敷市のまちづくりを担ってくださるパートナーになってくれる可能性もあるので、そういう視点で、生活がいっぱいのところを何とか市として支えていって、一緒にまちづくりを担う相手として、関わっていったらということが1点。

震災以降、宮城では発達障がいの子どものサポートをしていた団体が、障がいを持っている子どもさんは日常が変わることにすごくストレスを感じるので、パニックになりやすいから、その日のうちに連絡をとって安否を確認した上で、次の日から居所を再開したという事例、路上生活者を支えている団体が、路上生活者は日々サバイバルなので非日常に強くて、炊き出しのサポートをしたという事例があって、それからジェンダーの団体の方が、高齢者の女性が洗濯をしにくくて、それがすごいストレスになるので、洗濯隊を作って、避難所に行って洗濯の手伝いをしたという事例もあります。行政とか社協とか大きいところでできないことが市民活動を担っているところは動きも早く、予算をとらなくても民間のものを引っ張ってきて動くことができるので、防災という視点でも市民活動の持っている力をもう少しまちづくりの中で活かしていけるよう、パートナーとして捉えて作っていく仕組みができればと思っています。倉敷市の市民活動センターも直営の運営をされていますけれど、県の市民活動センターは民間が入ることによって、そのノウハウを活かして、市民活動の活性化もできていると思えます。そのあたりも入れて団体の支援もしていきながら、活かしたらよいのではと思います。

《市長》

市民活動の大切さについてお話いただきました、誠にありがとうございます。私が最初

に言いました公園とかマップとか、それから色々な耐震化のこととかも、言ってみれば、ハードのことなんですね。ハードは勿論、逃げる時には必要なところではありますが、それだけではできないわけで、今言っていたように、市民活動とそれぞれの自主防災組織、NPOの皆さん、市民の皆さんによる逃げる時の活動、もしくは避難者の人を受け入れたときの活動、例えば昨年のごとでいえば、今日も来ていただいているようですが、倉敷市から東日本に多くの市民の皆さん約500人くらいの方が、ボランティアで行っていただきました。その時も市がしたことはバスを出したことで、実際に活動をしてくれたのは市民の皆さんで。それが東日本で、とくに岩手県を中心に遠野市さんと連携してしまいましたが、倉敷は非常によくやってくれたと今も言っています。市でできるハードの部分や体制作りの部分、実際にそれぞれみなさんが活動して、縦割りじゃなく色々入り組んで、何重にもなってくればより効果も上がって、色々なルートから援助ができるのではないかなと思うので、本当に大事なことを言ってくれたと思います。市民活動を皆さんと一緒に活発にしていくことが、色々な面からしていくことが、防災には一番重要なことだと思います。例えば妊婦さんを助ける団体だったり、避難所ができた子どもさんの相手をする（子ども広場のような）団体だったり、もしくは年配の方とお話して下さったり、先ほども洗濯をして下さったりするとか、そういう色々な団体の皆さんが活動して下さることがまさに、「自助・公助・共助」といいますが、それによって一人でも多くの方が避難所でも元気に暮らしていただいたり、一人でも多くの方が助かるのではないかなと思いますので、私も防災活動のなかでの市民の方の活動が半分以上を占めるのではないかなと思います。もちろん、自分がまず逃げさせていただいて、そして一緒になって活動していただく。自分で逃げるができない方はみんなで助けようということだと思います。私も同じ考え方です。ありがとうございます。

《参加者Jさん》

私は大人4人、子ども3人の7人家族で二世帯住宅です。今日ここへ来るときにも、家内ともめたんですけど。本当は今日の朝の災害と女性というのでも聞いたんですけど、家内に反対されました。午前中は私の担当で子育てをしております。孫、双子ですけど、女の子で満1歳。これ私が、昼間は一人で育ててるんですけど。正式には孫育てですが、私は子育てと思っています。

いつもしてるときに、二人に食事をやるときとか、風呂に入れてるときとか、火事が起きたり、地震が起きたり、台風がやってきたりね、どうやって二人の子どもを、孫を連れて逃げ、どうしたらいいんだろうかと。個人で逃げんとどうにもならんと言われるんで、そういう危機意識は持つんですけど、一人で子どもを、今日も午前中、一人で二人の子どもを相手してたんですけどね。これほんとに現実問題として今日のテーマになったことが、私はどうすればいいんだろうか。私と同じように、若い人が外に出て、おじいちゃんおばあちゃんが育てるときに、家内が買い物に行って、私が一人のとき、こういうことが現実起きたときには。お年寄りとか障がい者とかよくテーマに出るんですけど、私のように一人で孫の世話をしているとか、若い女の人で、一人で三人も四人も子どもを育てる人は、子どもが一番で、子どもを助けるために、よく親は亡くなったとか、震災でもそういう話を聞くんですけど。うちはまず赤ちゃんですから、オムツを必ず備蓄しとかないかと家内が昼間は買いあさってます。私が赤ちゃんが飲む水の担当。おっぱいがよ

うやく切れそうなので、ミルクを飲まさんといけんので。今イオン水、スーパーなんかで、赤ちゃんのために、水道水じゃなくイオン水を買ってスーパーにお世話になってます。

さっき市長がみらい公園のことを言われましたけど、うち場合利用するとなったら、子どもが幼稚園か小学校位にならないと、あそこの防災利用するところまで行かれないんです。だから、病院でもいいし市でもいいですが、幼児とか赤ちゃんがおるお母さんを緊急の場合は受け入れるところがあれば、お母さんも安心して子育てが出来ると思うんです。ひとつご検討をお願いします。

《市長》

小学校区は老松小学校ですか。今、いいポイントを言ってくださいます、老松小学校。みらい公園は線路より北側にありますので遠くなるんですけど、小学校・中学校の避難場所ということで、基本的には体育館が避難場所になっています、屋内体育館ですね。東日本震災のときは、避難場所には教室とかもありましたけども。老松小学校は非常に年数もたって、倉敷市内で一番古い小学校だったんで、今建て替えの検討を進めています。その時に、老松小学校については、最初から教室へ非難をしていただけるようなことも考えに入れてするようにしたいと思っています。昔で言えば倉敷市内の小学校、屋根が斜めになっている所が多いんです、水はけの観点から。屋根が平地であれば、屋根のところに逃げられますよね。何千人乗っても大丈夫です、小学校は。ですので、なるべく最初から逃げてもいいように。小学校であれば教室は区切られていますから、小さい子どもさんがいて避難してもらっても部屋が分けられるように、と思ってるんです。

《参加者 J さん》

それは、学童保育もいけるんですかね。

《市長》

避難所で学童保育ですか。長期になったときにはあるかもしれません。段々そういう風に体育館だけでなく、教室の方も使えるようなことを考えておりますので。災害がないに越したことはないんですけど、そういうことも考えながら小学校とかをやりかえる場合はやっていきたいと思えます。ありがとうございました。

《参加者 K さん》

防災ということで、今回福島の方は行ってないんですけど、前回の阪神・淡路の時には、3回ほどお手伝いをしに行かせていただきました。その時にすごく思ったのが、火災とか、そういったところの自治というか、自主防災は男性の方、力仕事ですけども、ああいった長期に渡ることですよね、災害に遭われて長期に渡って避難しなければいけないとか、そういったときは食べること住まうことに関しては、やっぱり女性の仕事だと思うんですよ、これは。男性・女性というと今の時代、怒られるかもしれないんですけど。得手不得手というのはあると思うので、女性が仕切っていくって言うと変ですけど、やっぱり生活のこと、子どものことであったり老人の介護の問題であったりというところは、女性がうまく連携していくことで、ものがうまく回るということは大いにあると感じましたので。ではそれをどうするかというと、普段から町内会・おかみさん会という、小さい自治があり

ますよね。これをいきなり災害が起きたからと言って、「じゃあ市の方、何かやって下さい。」とかって、はっきり言って無理な話だと思うんです。起きたとっさは、ご近所さんだと思うんですよ。だから、近所関係の連携と言うのを強めないといけないのに、女性は適任だと思うんですね。で、どこのお子さんはどうだとか、どこどこにおじいちゃんおばあちゃんがいるだとか、個人情報を含めてご近所さん同士だったらお互いに知り合っているという特典もありますから、昔のようにそこはきちんと確立していかないといけないと、すごく思います。で、障がい者のことに関しましても、うちも発生障がいの子とかもいますけども、体がご不自由な方なんていうのは、地域が助け合っていかなければいけない。今回のことも含めて、他の県の話ですけど、「ゆい」と言って、お互い相互扶助、助け合いが発達している地域ですよ、田舎ですけども。そこでは災害があったとき、誰一人死ななかつた、それから、子どもたちが普段からの教養で、高台に逃げろ、とにかく高いところへ逃げろと言われた子どもたちは助かったと聞きました。だから、普段からの学校教育であったりですか、そういうところに防災の概念を入れていくということと、今NPOの方がたくさん活躍されていますけれど、こういったNPOの方々、いいNPOのところはしっかりと支援をしていただいて。行政だけでは出来ないことはいっぱいあると思いますので、草の根的にNPOとかで頑張ってもらってる方々にある面をお任せして、防災も一緒にやっていくという形がいいんじゃないかと思います。

それから、今回のテーマであります「まちづくり」ということなんですけど、民生委員の方々に聞きますとね、今私は、実は先程の方と同じ阿知3丁目に住んでおりますけれども、あそこでは、年間発見されずに亡くなられたご老人というのはいらっしやいません、お一人の方もいらっしやいません。ところが近年マンションがいっぱい出来ておまして、去年3人ご近所でも、不明で亡くなられた方々がいて、民生委員の方が、「警察の検死があったりして大変だった」と言われましたが、それは全部マンションにお住まいの方でした。やっぱり今のマンションと言うのが無計画にポンポン建つんですけど、そういったときにそのマンションに一体誰が入ってくるのか、今までの古い自治の仕組みの中になんかいないものいきなり来て、外部からの人たちが入って来られて、お互いの交流がない。何階、同じフロアでもお互い知らない人たちが住んでいる、という状態では、何か災害があったときには無理だと思いますね。やっぱり災害があったときには、考えることは咄嗟に出来ませんので、普段からのつながりであったりとかって言うのが、命を助けるのに一番、初動に必要なエネルギーになっていくと思います。

それからちょっとだけ駅前開発について言及させていただきますと、今私がここにずっと生まれ育って思うことは、「倉敷らしさとはなんだろうか」ということですね。防災という面からだけ考えたら、短絡的に言うと、ビルを建ててしまえば火事になったときに危なくはないではないかとか、それから耐震強度の問題であったりとかというのがありますけど、同時に倉敷って言うのは観光都市、観光で世界中からお客様をお呼び出来るようなまちづくりをこれからしていかないといけないんだと思います。守りに入るんじゃなくてこれから広げていかないといけないと思います。で、そうなったときに、例えば、アメリカの最近の研究では、「ビル風」という問題がありまして、ビルが竜巻を起こすんですね。それが近所に起きた火を巻き上げて火柱を作る。で、その火柱で焼けてしまうっていう。これはまだ一つの、新しく最先端で言われてる問題ですけど、テレビでこの間拝見しました。そういった問題も含めて、ビルが起こす突風とか、そういった弊害っていうのも含め

て、まちづくりっていうことを考えていっていただきたいなと思います。

それから、市民が駅前のことししろ、倉敷のまちししろ、どういうふうにするんだっていうことをもっと話し合うべきだと思うんですね。一体自分たちがどういう未来を描きたいのかとか、海外からまでお客様をお呼びできる街にしたいのだとか、どこにでもある普通の街にしたいのだとか、駅前に立つところが倉敷なのかどうか、という感じもしますので、そういったことも含めて。防災は確かに一番大切ですけど、私は防災に一番大切なのはコミュニティだと思っています。人のつながりが人を助けるといいますので、人のつながりが絶えてゆくようなまちづくりには、ならないようにとは思っていますので、よろしくお願いいたします。

《市長》

本当に、つながりの大切なお話を聞いていただきまして、ありがとうございます。先ほどもそうでしたが、東北のときも女性が活躍されて避難所がうまくいった。もしくはコミュニティがしっかりしているところは、助かった方の割合が非常に高いと伺っておりますので、そういうお話を倉敷市内の方でもどんどん伝えていきたいと市の方でも思っておりますし、それで、近所づきあいが強いところの方が災害には強いということもみんなが共通して思ってもらえるように、しっかり頑張っていきたいと思いました。

《参加者Lさん》

私、去年6月の第9回のボランティアで岩手に行かせていただきました。市の方で援助していただいたから行けました。本当にいい経験をさせていただきました。ところが、今度9月3日に、私のところが床上浸水になってしまったんです。私がボランティアに行っていたということで、隊長さんとか、すごく応援に来て下さって、すごく至れり尽くせりしていただいて、感謝しています。それから、今年の8月30日に床下浸水になってしまったんです。裏の道の横に1m幅の用水があるんですけど、田んぼに開戸板（樋板）というのを入れているがために、家が110年もたっている古い家ですので水が逆流して、それがなければ、全然そういうことにはならなかったんですけど、そういうことがあって、31日に地元の人に見てもらって、もう少しモーターみたいなものでしていただけたら、私でも、用水の開戸板（樋板）の代わりに分を外すことができる。その板を外していただいたんですが、水圧があってとても外せなくて、逆流して水が入ってしまったんです。そのことをもう少しその方にお伝えしたくて。水島の道路で交通事故でドクターヘリで川崎医大へ入院してしまったんです。それで今は、倉敷リハビリテーションにいますけれど、もう大丈夫です。でも本当に目に見えないような感じでもあるんですけど、現実そういう風になったときに、やっぱり何とか協力できる範囲があれば、お願いしたいと思うし、私も防災関係ではお世話になったから、何かお役に立つことがあればさせていただきたいと思っています。

《市長》

ありがとうございました。東日本のボランティアの方も大変ご苦労様でございました。郷内は昨年9月の台風でも大変な災害になって、1日で400mm降って、倉敷市で最大の被害、水量だったもので。こんなことがなければいいんですけど。今、県と連携して復旧

もしております。用水のことは後でお伺いできればと思いますが色々な災害を受けまして、用水とか水の流れのことなんかも今見直しをしておりますので、今回お話を伺いしておれば、今後の見直しのときにうまく更新も出来るかもしれません。

《参加者 M さん》

今年3月にアリオ倉敷で「子どもたちに伝えたい防災のこと」というイベントを防災危機管理室、倉敷市さんと共催でやらせていただいております。昨年11月位から県内の幼稚園・保育園で、子どもたちが生きる力を育むために、ということで、防災の活動、「防災体験プログラム」を、呼んでいただければ、これからでも参りますが、やらせていただいております。先ほどのハザードマップの話とか、想定の話が出たんですけど、想定にも最大級に対する想定と、高頻度、頻度のあるものの想定があって、夫々対策が違ってくるのか、防災に関しては日本は災害国ですので、色々研究も進んでいるようです。岡山は災害が少ないので、そういったことに対する知識が行き渡ってないように感じております。これは倉敷市だけでなく、他の市にも、要望として、県の方にも出しているんですけど、「防災士」という資格がありまして、これは研修を受けて試験に通れば、防災士という資格が与えられるというものはあるんですけど、岡山県は、資格試験・研修を受けた者に対する補助の制度を持っているんです。それは個人に対してでなく、市町村に対してというスタイルになってますので、市の方が、市民・在勤者がそういった資格をとった場合は、資格に対する補助をしますという制度を、来年度の予算の中で付けていただくと、研修があったときに受けられるものだそうです。そういったことをご検討いただきたいということと、もう一つは、私自身は東京の方で研修を受けて防災士の資格を取ってきたんですけど、やはり東京で受けますと、東京ローカルで都市防災の話になります。この週末には山口の方でもあって、そちらも誘われてるんですけど、日本海側の、山口の方のローカルに即したお話が、当然地域の防災ということで、入っていくわけですね。私が今活動している、子ども防災ネットワーク岡山という団体の中で、防災士の研修が出来るような提案をしていきたいと思っておりますので、そのときは、ご相談に上がりたいと思います。

《市長》

ありがとうございました。先ほどの子ども防災体験のプログラムは、倉敷市でもお願いしたら、やっていただけるのでしょうか？

《参加者 M さん》

喜んで。先日6月には、岡山市内山下幼稚園で。これが8回目か9回目ぐらいで。最初はずっと倉敷市でやっておりました。その様子をNHKのHPでもご覧いただくことが出来ます。これは私たちが考えたということではなくて、国の内閣府の防災の関係で、いろいろ活動されている国崎先生、今度ケーブルテレビさんの8月11日に30周年記念のイベントとして、玉島のほうで講演をされるということなんですけど、その方が考えられたプログラムで、非常に実際のいいプログラムだと思います。

《市長》

また教えていただければと思います。ありがとうございました。それから、防災士の資

格の件なんですけど、赤木さんのほうからもお話もありまして、いろんな方からも、防災士の資格を取りやすい倉敷市の仕組みというお話もいただいております。今検討しております。県の方とも相談をし取りやすいように補助を、何万円かかかると聞いておりますので、地域で自主防災組織の方がとっていただく時とかの補助とか、検討したいと思います。

《参加者 N さん》

2～3市の方へお願いしたい。テーマから外れるかもしれませんが1点。我々がやっている活動と皆さんにご協力をお願いしたいことがあります。

まず、ハザードマップ。たくさん市の方からどんどんいいものを作っていて、また9月には地域ごとに作っていて、非常にありがたいと思うんですが、避難所につきましては標高・海拔がいくらと、先ほども市内300件ほどやったださるとのこと、非常にありがたい。私たちは、実はこれをお願いしようと思ってたんですけど、もうやったださるといふことで、非常に助かります。私も自分の家が海拔1mなんです。うちの地域は0の所が結構ありまして。いつも少し大雨がありましたら、みんなどこへ逃げようかといふことであるんですが、それは地域の問題ですけど。このマップの中で、やっぱり玉島地区のことを言いますと、避難所がですね、本当に3m以上の水害になりますと、もうほとんどなくなって、それ以上のところと言ったら、3箇所ぐらいしか避難所がないといふような現状になります。そういうことで大変ご苦労だと思ふんですけど、避難所の洗い直しをやったださるといふんですけど、もう一度、ご検討いただけたらありがたいなと思ふます。

それと市の方とは関係ないんですけど、こういう良いマップを次から次へと作ったださるといふんですけど、今回も広報の中に挟まっているのを引っ張り出したんですけど、それじゃあ皆さんが、これをどの程度活用して、保管と言ったら失礼なんですけど、どういふように活用されているのかといふのが大切だと思ふんです。そういう点では配布方法も考えられた方がいいんじゃないかなと。広報が来ると、自分の必要な、といふか関心のあるところだけ見て、なかなか全面を見通すといふのが少ないと思ふます。そういうことで、私がいただいたのは、一つの袋に入れまして、ひとまとめにして、いるときには引っ張り出して見ようといふ形にしてるんですが、ぜひこれは、男どもといふのは大体横着なのが多いですから、家庭では、ぜひ女性、奥さん方が管理をして、みんなで見れるような方向付けでしたらいいんじゃないかなと思ふます。

緊急時に非常持ち出し、これについても皆さんいろいろご準備いたださるといふんですけど、やはり、家庭での女性の方が、こまめな配慮をいたださてないといふ、いざといふ時には、賞味期限切れだったとか、いるものがなかったとかといふようなことになろうかと思ふますので、みんなでご考えて準備しておけたらいいんじゃないかなと思ふます。

もう一点、これは違ふことなんですけど、PRの方。先に市長方から今のことについて。

《市長》

避難場所の洗い直しはささていたださこうと思っております。配布方法は、一番家庭の方まで届くといふことで、広報紙と一緒にと思っております。私としては、壁に貼ってもらいたいと思ってるんです。袋に入れたり、いざといふときに出して、といふ方が多いと思ふますが、家の壁に貼って、常日頃から家族みんなで見つ、「ここがああだ、こうだ」と言

っていただければと思うんですが、壁に貼ってくださいとまでは書いてなかったもので。ことあるごとに言って、議会とかでも質問もいっぱいしてもらい、関心を高めてもらえればと思います。持ち出し袋については、私もそう思います。家で常に女性の方がいろんなチェックを、冷蔵庫の中とかを賞味期限をチェックされる方も多いと思うんですが、そういう観点で持ち出し袋の準備をしてくださってる方も多いと思いますので。家の中の話し合いで、どこへ逃げるとか、どうやって連絡体制をとるとか、ということをお父さん・お母さんを中心にして、家族のみんなで決めていただくのが非常に大事だと思います。

《参加者 N さん》

ありがとうございました。あとPRを。現在のグループの活動状況を。私も倉敷市災害ボランティアコーディネーター連絡会に所属させていただいてる者ですが、倉敷市もないと言いながら、災害が結構。去年の台風12号、以前には平成16年の台風16号、被害が結構あり、このごろの異常気象の中で何が起こるか分からないということで、24年度の市民企画提案事業の中で、防災危機管理室と協働して、「災害に強い地域づくり」というテーマで今始めております。地区を5地区に分けて各支部があるわけなんですけど、小学校区単位の防災訓練、講演会を含めて、今まで3回ほどやっております。児島、倉敷、玉島と。今月18日には水島の方で、同じようなことをやっていこうと思います。あわせて、12月1日バスで、神戸の震災記念館ともう一つは今ははっきり言えませんが、津波とかを疑似体験する西大阪の方に新しい施設が出来たので、現場研修に行こうと募集しております。それから、今日皆さんにやっていただいた向こうのプラザの方の5階で、12月9日に、防災に関する講演会を開催予定しておりますので、ご関心のある方ばかりだと思いますので、ご参加いただけたら有難いと思います。よろしく願いいたします。

《市長》

ありがとうございました。災害ボランティアコーディネーターとしての活動で、いろいろやっていただいていることを、ぜひ皆さんのほうでも参考にさせていただきたいと思えます。今日、防災のことについて、女性の力が大変大きなものだという事と、日頃から家庭の中で連絡先とか避難場所とか決めておいて、話をよくしておく事とか、小学校・中学校、それから要支援の方の避難場所などを、しっかり取り決めをしていく事、地域でつながりを持ってやっていく事が、防災のために非常に大事だということを皆さんに言っていただいたように思えます。市としましても、今日のお話を受けまして、防災の取り組みを一層頑張りたいと思えます。今日は大変長時間に渡りまして、お話を付き合ってくださいまして、誠にありがとうございました。

*** (以下は、当日欠席のためFAXで意見を、と事前に送付されたもの) ***

防災に関する女性の役割について。女性の素晴らしい所は、○細かい所に心配りが出来る。○忍耐強く行動できる持久力がある。など沢山あります。そうした女性ならではの感性・行動力を最大限発揮できる環境づくりが重要と考えます。また、「育児」「子育て」の観点からも女性が果たす能力は多々あると考えます。以下具体的に言います。

1. 「子ども会」「PTA」「習い事」「スポーツ塾」など子どもを仲介した「ママ友」のネットワークを生かす。 お母さん方は子どもを介して多くのチャンネルで沢山の母親間の情報網

を持っています。そうしたママ友ネットワークに「防災」に関する話し合いの機会を持ち、行政と連携する取り組みはいざという時のセーフティネットの担い手になると考えます。

2. 昨今、独居の高齢者や要援護者が増えています。物理的には救助するには男性の力が必要ですが、日頃の近所づきあいで「どこに誰がいて、どんな状態か」という「情報」の共有は女性の方が得意と思われます。働き方が多様になった今、もう一度「あの人に聞いたら何でも知っている」という地域のキーパーソンを育てていくことが重要です。
3. 避難所の運営に関して、東日本大震災で明らかになった様に、「プライバシー」の問題は重要です。「乳児への授乳室」「女性専用トイレ」「更衣室」など女性が安心して生活できる空間、環境づくりも不可欠です。そのためにも、「防災」「危機管理」の部署に常時複数の職員を置き、男女各々の特性を生かしたアイデア、発送を基に、計画→演習（訓練）→検討 を実行していただきと考えます。以上。